器械運動分科会情報

はじめに

武蔵野大会での器械運動分科会は、対面とオンラインのハイブリッド開催で行われました。「みはま大会」は基本 対面で行われるということですが、基調提案をリモートで行う関係もありオンラインへの対応も考えた準備も行いたいと考えています。

「みはま大会」は、基調提案、実践報告に小学校（兵庫）、中学校（滋賀）、研究報告が予定されています。中学の実践は、5 月 12 日に「はるの学校」（今までの中間研究集会）で公開授業を行いました。滋賀支部の若手の先生たちと共に授業の準備をしてくださっています。

１．器械運動分科会の研究の方向性

以下のような研究の方向性を考えています。

（ア）器械運動の実技指導方法の紹介（可能ならば分科会内の実技コースとして設定したい）

（イ）器械運動の技術指導の系統性研究、

（ウ）スポーツとしての器械運動（「体操競技」およびそれに類する競技）研究、

（エ）器械運動から派生した研究課題として「からだ」研究、これには「体操」研究を含みながら、究極的には「体育とは何か」研究に繋がる研究。

(ア)については、「みはま大会」として、①各分科会に初参加者や学生への対応する②基礎講座を設定して対応するという 2 案が現地実行委員会から示されましたが、武蔵野大会の傾向では基礎講座には学生が、器械運動分科会には小学校の若手の先生が多く参加（学生もいましたが）する傾向がありました。ですから、基礎講座が開催されるか否かを問わず、日程を実践検討コースと入門コースの二つに分けることを想定して準備を進めていきたいと考えています。その場合、入門コースに専念できる人材の確保と 2 日目終日使える場所の確保が必要になるので現地実行委員会と打ち合わせを行いながら進めていきたいと思います。

（エ）については、現在「表現・民俗芸能・ダンス」分科会との合同研究会の準備に向けて動き始めています。「みはま」大会で動きを作り「松島」大会で何らかの形にしたいと構想しています。

（１）器械運動の技術指導の系統性研究

（イ）については、今までは小学校中心に研究が進められていました。本来であればより雄大な技を目指して発展させることができる跳び箱運動が「小学生」という発達段階に規定されて限定的な指導にならざるを得なかった面がありました。また、小学校から高鉄棒が撤去されていったということから鉄棒の技でも限定的にならざるを得ませんでした。これらについては、中学校での実践が加わることで大いに発展する可能性があります。

加えて器械運動ができるようになるためのからだ（動き）育てとしての＜ねこちゃん体操＞を一つのパッケージ化された教材としてではなく、その本来の目的である「器械運動ができるようになるためのからだ（動き）育て」という視点から問い直し再構築することが可能になると思われます。つまり「ねこちゃんがおこった…」ではなく、その中身を器械運動の技と結びつけながら探究的に学んでいく実践です。バイオメカニクスとの関連性も持たせることができるのではないでしょうか。

（２）スポーツとしての器械運動（「体操競技」およびそれに類する競技）研究

（ウ）についても中学校の実践が大いに期待されるところです。今年の実践は「競技会でよかったのだろうか、発表会ではいけないのだろうか」といった視点で議論が

なされました。端的には「競技会もあり」もちろん「発表会もあり」ということになりますが、問題は子どもたちの技能だけでなく人間関係も含めた在り方全体を見て取って、何をゴールに据えることがよいのか、ということを子どもたちとともに考え決定していくことが重要になります。小学校では高学年で行えるかな？という実践ですが、中学校ならばいずれの形式で行うにしてもより高度な内容に挑戦していけるはずです。

さらに「体操競技およびそれに類する競技」と記したように、「体操競技」を器械運動の頂点とする見方だけでなく、新体操やトランポリン、パルクールといった競技へも目配りすることで、器械運動をスポーツとして捉える視点にも新しい方向性を見出していく可能性があります。先日のテレビ番組でもパルク―ルに意欲的に取り組む女子中学生の姿が紹介されていました。基礎的な技を身に着けた中学生ならではの発展の可能性があるのではないか、と期待しています。ちなみに私もこの秋小 2 で跳び箱を複数設置して連続的に跳ばせる実践（BGM は「マツケンサンバ」と「chopstick」です）を行いましたが、期せずしてパルクール的な動きが出てきて「やって楽しい、見て楽しい」実践になりました。

（３）器械運動から派生した研究課題として「からだ」研究、これには「体操」研究を含みながら、究極的には「体育とは何か」研究に繋がる研究

（エ）は、<ねこちゃん体操>が作られた経過にみるように…従来のように技の指導をしているだけでは上手くなっていかない現実に向き合う中で、技の練習以前の「からだ（動き）育て」という面を強調せざるを得なくなってきたという背景があります。個人としてはこのような発想は<ドル平泳法>を作る時点で、自覚的ではなかったにしても既にあっただろう、と考えています。S 先生の研究も「所作」ということに注目しての「からだ（動き）育て」とみることができるように思います。私は、陸上運動における「立つ」「歩く」「走る」ということも「からだ（動き）育て」という視点から研究を深めることができるのではないか、と考えています。

個人的にここ十数年、器械運動分科会で研究提案として提起してきたことなのですが、これからは、「からだ」をキーワードにいくつかの分科会の合同企画として研究を進めることが必要ではないか、と考えています。具体的には教材別では「器械」「水泳」「陸上」（いわゆる閉鎖系の運動）と「表現・民俗芸能・ダンス」そしてここに「幼児の運動遊び」分科会「特別なニーズのある子どもと体育」分科会も大いに関係してくる、と思います。「運動文化論」で対応できるのか、それとも新たな理論的な枠組が必要となるのか、は今後の議論を待つことになりますが、いずれにしても各分科会の中でそれぞれ独自に動いてきたものを総括していく時期がきているように思います。

おわりに

毎年、「器械運動」分科会には多くの参加者があります。それは「自分もできるようになりたい」「子どもたちもうまくしたい」という現場の先生のニーズが多いからですし、それに答えられるだけの先輩諸氏による研究実績があるからだと考えます。「みはま大会」では、中学校では複数の若手の先生が実践をしてくれます。小学校にも研究を主体的に担ってくれる若手が現れてくれることを願っています。「みはま」大会ではベテラン・中堅・若手が集い研究を深めていけるよう準備をしてきたいと思います。本稿への批判も含め多くのご意見を頂いた上で準備を重ね「みはま」大会の成功に繋げられれば幸いです。